

「ファミレス」について

まちを観察し、比較・分析するとき、ファミリーレストランの客層を見るようにしている。

昼間のファミレスは、その周辺の昼間人口に関する情報を与えてくれる。勤め人、子ども連れ
の女性、中高年の女性グループ、作業服を着た人など、その割合をみれば、周辺がベッド
タウンなのか業務地区であるのか、どんな経済活動が行われているのか想像がつく。

夜間のファミレスは、そのまちの住民の品格まで教えてくれる。靴を履いたまま椅子の上に
立つ子ども、それを意に介さずタバコを吸っておしゃべりする親、タバコを吸う制服の中学
生など、その割合によって周辺地域に暮らす人々の様子が想像できる。感覚的なもの、経験則
であるが、県の南部は、北部に比べてお行儀の悪くない客が多いような気がする。

新興住宅地では、深夜にも中高生らしき姿がある。ドリンクサービスだけで、長時間そこに
いて、おしゃべりをしたり、ケイタイをしたり、試験勉強らしきことをしている子も少なく
ない。大学の近辺では、そうした中高校生が、そのまま大人になったような光景を目にする。

私が住んでいる西原村は、熊本市中心部から30km弱、阿蘇外輪山の山麓に位置する農村
である。最近、外輪山を貫いてカルデラの内側に抜けるトンネルが開通したこともあり、熊本
市内から阿蘇方面への交通量が急増している。ロードサイドには、コンビニやレストラン、野
菜や農産加工品の直売所が相次いでオープンし、すっかり観光地化してしまった。ミニ開発も
盛んで、新興住宅地も形成されている。人口の伸び率では、県下ナンバーワンである。

そんな地域だから、2年前にファミリーレストランが進出した。この店では、夜のメニュー
として、揚げ物、焼き鳥、刺身といった居酒屋風の料理を揃えている。夜は地域の居酒屋にな
るという営業戦略であろう。実際に“居酒屋の客”も見かける。

大都市圏では、自宅のある郊外の駅まで帰って赤提灯で一杯やるというサラリーマンの生活
スタイルがある。鉄道のない西原村でも、自宅近くで一杯というニーズは、当然ある。今時は、
旦那の晩酌に女房が毎晩付き合うというようなことは、ないのかも知れない。女房も酒を楽し
みたい。子ども連れでも飲めるタイプのレストランは、ありがたい。

このファミレスの夜の客層から判断するに、我が西原村は、さほど品が悪いところではない
ようだ。しかし、こんな田舎の店でも、夜遅くまで若い子がたむろしているし、10時頃にも
幼児連れの客がいる。そのそばで、一人で居酒屋している中年の男性もいる。小なりといえど
も、2千世帯が暮らす村である。いろんな家庭があるだろう。しかし、この若い子らの家庭は、
どうなっているのか。それが、想像できない。背後に家族の姿が見えない。チェーン店特有の
空間の演出効果だろうか？ たとえ家族連れでもあっても、どこか家族の気配が不足してい
るような不思議な感覚に陥る。ファミレスでファミリーの喪失感を味わうのはどうしてだろう。
くたびれて一人で晩飯食ってる自分の心の持ち様か、それとも年とったか(そりゃ嫌だ)。村自
体が、ファースト風土化していくような気になってくる。ファミレスのレスは、ホームレスの
レスのようであり、それは、社会全体の気分を象徴していると言えないだろうか。